

# 近世前期における『円機活法』 受容一斑

—『詩苑綺繡』・『詩林要玄』—

伊藤 善隆<sup>a</sup>

<sup>a</sup> 湘北短期大学総合ビジネス学科

【キーワード】

漢文学 近世前期 『円機活法』 『詩苑綺繡』 『詩林要玄』 松永昌琳

## はじめに

本稿は、『詩苑綺繡』と『詩林要玄』についての報告である。どちらも近世前期に刊行された小本の詩語集であるが、従来ほとんど注目されることがなかった。今回、不完全な伝本ながら、この両書（個人蔵）を実見し、両書が共に、『円機活法』の内容を摘録したものであることを知ることができた。

『円機活法』は、明の楊淙の著とも王世貞の編ともされる詩学書で、『円機活法韻学全書』と『円機活法詩学全書』の二篇から成る。それぞれ作詩の際に用いる語彙を集めたものだが、「韻学」は韻ごとに分類編集したもの、「詩学」は、天文、時令、地理など四十五の部門に分けて分類編集したものである。我が国でも菊池耕斎が訓点を付した和刻本（明暦二年跋）が出版されて以来、版が重ねられ広く流布した。流布の範囲は、漢詩作者はもとより、俳人たちの間にまで及んだと考えられており、現在でも俳諧作品の注釈をする場

合などには資料として用いられる。

さて、『詩苑綺繡』と『詩林要玄』は、ともにこの『円機活法詩学全書』（以下、本稿では『円機活法』と記述する）の内容を摘録したものである。翻って考えてみれば、小本の形態を取る詩語集は、江戸時代を通じて、じつに様々なものが数多く出版されているが、その比較的初期のものが『円機活法』の内容を摘録したものであったこと、しかも同時期に内容が重複する二種類の詩語集が刊行されていたことは、当時の詩壇の需要や『円機活法』の流布を考える上で興味深い。ここでこの二書について報告する所以である。

## 一 『詩苑綺繡』

『詩苑綺繡』（延宝五年三月序跋）は、『国書総目録』に収録されておらず、国文学研究資料館の「日本古典籍総合目録データベース」にもその名が見えない。また、近世前期の詩作法書について調査した、上野洋三「詩の流行と俳諧」（『文学』昭和48年11月、のち『芭蕉論』筑摩書房、昭和61年10月、所収）にも言及がない。

編者の詳細は不明だが、序と跋を寄せた藤昌琳は、松永昌易の子である松永昌琳である。昌琳は生没年未詳とされるが、小高敏郎『松永貞徳の研究』（至文堂、昭和28年11月）によれば、慶安四年の生まれで、貞享二年以前の没と推測されている。

当時刊行された書籍目録を確認すると、貞享二年版『正改広益書籍目録』（延宝三年版<sup>『今昔書籍題琳』の増補版</sup>）に、「一 詩苑綺繡<sup>『円機活法』と記載があることが確認できる。</sup>また、宝永六年増修版・正徳五年修訂版『書籍目録大全』には「詩苑綺繡<sup>ラシキシツ</sup>」とルビが付しであり、書名は「シオンキシユウ」と読ませていたことがわかる。さて、調査し得た伝本（個人蔵）は、状態の悪い改裝本である。

第一丁を欠き、末尾の丁付も「九十二」丁から「九十七」丁へ飛んでいる（本文の最終丁が「九十二」丁、跋の最初の丁が「九十七」丁となっている）。ただし、第一丁は補写され、目録・本文も全丁を存しているので、本書の概略を知ることが可能である。以下、その書誌を記す。

書型 小本一冊。15.3 cm × 11.2 cm。

表紙 後補香色表紙。

題簽 なし。表紙左肩に「詩苑綺繡」と墨書。

見返し 後補見返し（墨書の落書きあり）。

序文 序題「詩苑綺繡題辭」（但し補写による）。序者・年記

「延宝丁巳季春上澣／釣雪斎藤昌琳題／「釣雪」（陰刻

方印）。四周双辺白口双花魚尾。中縫に丁付（「二・

「三」、但し第一丁は補写のため丁付なし、全三丁）。

每半葉六行十一字。

目録 目録題「詩苑綺繡／目録」（末尾に「目録畢」とあり）。

四周双辺白口双花魚尾。中縫に丁付（「四」）。

本文 内題「詩苑綺繡」。尾題「詩苑綺繡「終」」。四周双辺

白口双花魚尾。中縫に丁付（「一」「二十九」「三十一」、

「三十」（この箇所、乱丁）、「三十二」）「九十二」

每半葉十二行十六字内外。

跋文 （昌琳跋）跋題「詩苑綺繡跋」。跋者・年記「峇／延宝

五年三月三日／藤昌琳跋「醒吟」（陽刻円印）。四周

双辺白口双花魚尾。中縫に丁付（「九十七」「九十八」）

每半葉六行十一字。

（敬孟跋）題・年記なし。末尾に「敬孟」とあり。四

周双辺白口双花魚尾。中縫に丁付（「九十九」）每半葉

六行十一字。

刊記 「下立売通河西五町目／浅田四良兵衛刊行」。

丁数 全九十九丁。

つぎに序文と跋文を示す。<sup>(3)</sup>

### （昌琳序）

詩苑綺繡題辭

烏号之弓、谿子之弩、不能無弦而射。越舡蜀艇、不能無水而浮。

竟陵王之刻燭、肅文琰之打鉢、影響未絶。其詩立成、是皆馳心

於文囿、遊目於詞（一才）林。苟不平素之積功深者、其焉能

至之。諺曰長袖善舞、多錢善買。此言多資之易為工也。雖有敏

才、讀書不多、則欲作好詩亦已難矣。夫臨文会而不能吐一辭者、

平生不學（二ウ）之過<sup>ア</sup>也。何惜<sup>ニ</sup>數年<sup>ヲ</sup>勤<sup>ニ</sup>學<sup>ヲ</sup>、長<sup>ク</sup>受<sup>ル</sup>一

生<sup>ノ</sup>愧<sup>ヲ</sup>辱<sup>ヲ</sup>哉。然<sup>レ</sup>則<sup>レ</sup>詩豈<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>不<sup>ル</sup>學<sup>乎</sup>乎。不<sup>レ</sup>學<sup>レ</sup>詩以<sup>テ</sup>無<sup>レ</sup>言<sup>コト</sup>。

聖<sup>ノ</sup>教已<sup>ニ</sup>如<sup>レ</sup>此<sup>ノ</sup>。衆<sup>ノ</sup>人何<sup>ソ</sup>容<sup>レ</sup>置<sup>ニ</sup>不<sup>ル</sup>喙<sup>ヲ</sup>置<sup>キ</sup>其<sup>ノ</sup>間<sup>ニ</sup>。明<sup>ノ</sup>王世貞、

作<sup>ル</sup>円機詩學<sup>ノ</sup>一書<sup>ヲ</sup>。其<sup>ノ</sup>功於<sup>ル</sup>駢<sup>ノ</sup>壇<sup>ニ</sup>、最<sup>モ</sup>大<sup>ナリ</sup>。然<sup>モ</sup>、卷<sup>ノ</sup>帙<sup>ノ</sup>文<sup>ノ</sup>

（二二才）博<sup>ニ</sup>シテ、窮<sup>ニ</sup>郷下<sup>ノ</sup>邑<sup>ヲ</sup>、不<sup>レ</sup>獲<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>尺<sup>ノ</sup>觀<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>拓<sup>ニ</sup>見<sup>ノ</sup>聞<sup>ノ</sup>。

若<sup>キハ</sup>此<sup>ノ</sup>編<sup>ヲ</sup>、乃<sup>ニ</sup>綴<sup>ニ</sup>拾<sup>シテ</sup>其<sup>ノ</sup>品<sup>ヲ</sup>題<sup>大</sup>意<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>便<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>觀<sup>ノ</sup>省<sup>ニ</sup>。

花<sup>ノ</sup>晨月<sup>ノ</sup>夕、袖<sup>ニ</sup>スル<sup>キハ</sup>之<sup>ヲ</sup>則<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>助<sup>ニ</sup>雅<sup>ノ</sup>筵<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>鼓<sup>ヲ</sup>吹<sup>ヲ</sup>焉。人<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>シテ

躡<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>山<sup>ニ</sup>而躡<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>垓<sup>ニ</sup>。博<sup>ノ</sup>雅<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>士<sup>モ</sup>亦<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>忽<sup>ニ</sup>レ<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>哉。實<sup>ニ</sup>吟

一<sup>ノ</sup>苑<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>（二二ウ）席<sup>ノ</sup>珍<sup>ニ</sup>、詩海<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>葦<sup>ノ</sup>航<sup>ナリ</sup>也。頃<sup>ロ</sup>書<sup>ノ</sup>肆<sup>ノ</sup>某

將<sup>レ</sup>鉅<sup>ノ</sup>梓<sup>ニ</sup>、而<sup>レ</sup>就<sup>ニ</sup>予<sup>ニ</sup>需<sup>ニ</sup>序<sup>ヲ</sup>。披<sup>キ</sup>閱<sup>ニ</sup>トキハ之<sup>ヲ</sup>、則<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>埃<sup>ノ</sup>汎<sup>ノ</sup>

覽<sup>ニ</sup>銷<sup>ニ</sup>ト<sup>ヲ</sup>晷<sup>ヲ</sup>。而<sup>レ</sup>學<sup>ノ</sup>詩<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>要<sup>ノ</sup>尽<sup>ク</sup>在<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>矣。予<sup>ノ</sup>常<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>嗜<sup>ニ</sup>詩癖<sup>ヲ</sup>而

喜<sup>ニ</sup>為<sup>メ</sup>人<sup>ノ</sup>道<sup>ヲ</sup>也。叨<sup>ニ</sup>題<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>鄙<sup>ノ</sup>言<sup>ヲ</sup>。遂<sup>ニ</sup>二<sup>ノ</sup>校<sup>ノ</sup>讐<sup>ノ</sup>繡<sup>ノ</sup>梓<sup>ヲ</sup>。

庶<sup>ハ</sup>幾<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>書<sup>ヲ</sup>（二三才）一<sup>ノ</sup>播<sup>シテ</sup>覽<sup>ニ</sup>者<sup>ノ</sup>勿<sup>レ</sup>替<sup>ニ</sup>珍<sup>ノ</sup>レ<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>。

博<sup>ノ</sup>約簡<sup>ノ</sup>易<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>道<sup>モ</sup>、亦<sup>レ</sup>在<sup>ニ</sup>茲<sup>ニ</sup>耶。

延宝丁巳季春上澣／釣雪斎藤昌琳題／「釣雪」(陰刻方印)「三」  
ウ)

(訓み下し)

烏号の弓、谿子の弩、弦無くして射ること能はず。越船蜀艇、水無くして浮くこと能はず。竟陵王の刻燭、肅文琰の打鉢、影響未だ絶えず。其の詩、立成して、是皆、心を文囿に馳せ、目を詞林に遊ばす。苟も平素の積功の深き者ならざれば、其れ焉んぞ能く之に至らんや。諺に曰く、長袖善く舞ひ、多錢善く買ふと。此れ多資の工を為し易きを言ふ也。敏才有りと雖も、讀書多からざれば、則ち好詩を作らんと欲して、亦た已に難き矣。夫れ文会に臨みて一辭を吐く能はざるは、平生不学の過也。何ぞ数年の勤学を惜しみて、長く一生の愧辱を受くる哉。然れば則ち、詩豈に学ばざる可けん乎。詩を学ばざれば、以て言ふこと無し。聖教已に此の如し。衆人何ぞ喙を其の間に置くことを容れん。明の王世貞、円機詩学の一書を作る。其の功の騷壇に於ける、最も大なり。然れども、巻帙鉅博にして、窮郷下邑、尽く觀て以て見聞を拓ることを獲ず。此の編の若きは、乃ち其の品題大意を綴拾して、以て觀省に便す。花晨月夕、之を袖にするとときは、則ち雅筵の鼓吹を助く可し。人、山に躡かずして、埕に躡く。博雅の士も、亦た之を忽にす可けん哉。実に吟苑の席珍、詩海の葦航也。頃、書肆某、將に梓に鋟んとして、予に就きて序を需む。之を披き閱するときは、則ち汎覽晷を銷すことを疎たず。詩を学ぶの要、尽く此に在り。予、常に詩を嗜むの癖有りて、人の為に道ふことを喜ぶ。叨に之に題するに鄙言を以てす。遂に校讐繡梓す。庶幾くは、此の書、一たび播して、覽る者の替ること勿して、之を珍とせんことを。博約簡易の道

も、亦た茲に在る耶。

(昌琳跋)

詩苑綺綉跋

夫レ人ノ之暢ハ情ヲ遣ル興ヲ也、莫シレ過ハ詩ニ矣。故有下得ニ神一助一之句、泣ニシムル鬼神一之語上。且ツ人ノ之有言、皆ナレ為レ詩也。然不<sub>モ</sub>トキハ用心ヲ而調一節ニ之ヲ、則不<sub>レ</sub>能レ為レ詩。江山ノ形一勝、若シ無<sub>ト</sub>キハ詩人「(九十七)オ」、則為<sub>ニ</sub>欠一事。此<sub>レ</sub>言為<sub>ニ</sub>殺一風一景ノ者ノ難論シ焉。今<sub>レ</sub>人往々ニ作詩、而<sub>モ</sub>不<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>典一実一、不<sub>レ</sub>諳<sub>ニ</sub>熟語一。故<sub>ニ</sub>其<sub>レ</sub>言涉<sub>ニ</sub>浅一陋一。又可歎<sub>シ</sub>ツ也。此<sub>レ</sub>編登<sub>ニ</sub>詩一壇ニ之階一梯、寄<sub>ニ</sub>心一於吟一詠ニ者ノ所<sub>レ</sub>当<sub>ニ</sub>急一ニス、盖<sub>レ</sub>作<sub>ニ</sub>風騷一將<sub>ニ</sub>基一ヲ也。若シ能<sub>ク</sub>識<sub>レ</sub>キハ「(九十七)ウ」之ヲ、則奪<sub>レ</sub>錦ヲ之榮、写<sub>レ</sub>サレハ屏之名、豈在<sub>ニ</sub>遠一哉。

岬／延宝五年三月三日／藤昌琳跋「醒吟」(陽刻円印)「(九十八)オ」

(訓み下し)

夫れ人の情を暢べ興を遣る也、詩に過ぐるは莫し。故に、神助を得るの句、鬼神を泣かしむるの語、有り。且つ、人の言有る、皆詩為る可し。然れども、心を用ひて之を調節せざるときは、則ち詩為ること能はず。江山の形勝、若し詩人無きときは、則ち欠事為り。此の言、殺風景の者の為に論じ難し。今の人、往々に詩を作る。而れども、典実を知らず、熟語を諳んぜず。故に、其の言、浅陋に渉る。又た歎じつ可し。此の編、詩壇に登るの階梯、心を吟詠に寄する者の当に急にすべき所、盖し風騷の將と作るの基也。若し能く之を識るときは、則ち錦を奪ふの榮、屏を写さるるの名、豈に遠くに在らん哉。

〔敬孟跋〕

夫学<sup>フ</sup>コト之博<sup>シテ</sup>而取<sup>ル</sup>コト之約<sup>ナルハ</sup>、業斯<sup>レ</sup>成<sup>レリ</sup>矣。円<sup>一</sup>機活<sup>一</sup>法<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>所<sup>レ</sup>載繁<sup>フ</sup>シテ、而翻<sup>一</sup>閱歴<sup>一</sup>覧不<sup>ニ</sup>亦煩<sup>一</sup>乎。此乃摘<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>大意<sup>一</sup>以<sup>一</sup>拳<sup>ニ</sup>初<sup>一</sup>学言<sup>フ</sup>志<sup>ヲ</sup>之隔<sup>ヲ</sup>、則易<sup>ニ</sup>而易<sup>一</sup>知簡<sup>ニ</sup>而易<sup>一</sup>從<sup>レ</sup>カヒ。既<sup>ニ</sup>易<sup>一</sup>知且<sup>レ</sup>易<sup>レ</sup>從<sup>レ</sup>而無<sup>レ</sup>親無<sup>レ</sup>功者<sup>ノハ</sup>、未<sup>ニ</sup>之<sup>一</sup>レ<sup>ス</sup>〔九十九〕オ有<sup>ラ</sup>也。可<sup>ニ</sup>以<sup>一</sup>賦<sup>一</sup>、可<sup>ニ</sup>以<sup>一</sup>比<sup>一</sup>、可<sup>ニ</sup>以<sup>一</sup>興<sup>一</sup>。学<sup>レ</sup>詩之大意、略備<sup>ホ</sup>レリ焉。小子亦何<sup>ソ</sup>取<sup>ル</sup>コト之莫<sup>ラン</sup>。 敬孟

〔訓み下し〕

夫れ、学ぶことの博くして取ることの約なるは、業斯れ成れり。円機活法は、其の載せる所繁くして、翻閱歴覧亦た煩はしからず乎。此れ乃ち、其の大意を摘んで以て初学志を言ふの隅を挙ぐるときは、則ち易にして知り易く簡にして從ひ易し。既に知り易く、且つ從ひ易くして、親無く功無き者は、未だ之れ有らざる也。以て賦す可く、以て比す可く、以て興じつ可し。詩を学ぶの大意、略備はれり。小子、亦た何ぞ之を取ること莫からん。

以上、昌琳の序文では「円機詩学」の「品題大意」を、また敬孟の跋文では「円機活法」の「大意」を摘録したことがそれぞれ明記されているが、この「大意」とは、一般的に使う「大まかな内容」という意味での「大意」ではなく、『円機活法』の項目に「大意」とあるその部分を指している（後掲図版③参照）。なお、序文の記述では、『円機活法』の「品題」（後掲図版②参照）と「大意」を摘録したように記されているが、『詩苑綺繡』の本文を参照すれば、実際には『円機活法』の「品題」の項目の記述は摘録されていないことが確認できる（後掲図版⑤参照）。

ただし、内容を確認すると、『円機活法』に記載されるすべての「大

意」を満遍なく摘録したわけではないことが明らかに。先にふれたように、『円機活法』「詩学」は、語彙を四十四の門に分類収録したもののだが、『詩苑綺繡』は三十一門を収録している。その取捨選択の概略を確認するため、両者を比較してみたい。（表1）に示すのは『詩苑綺繡』の分類である。

（表1）『詩苑綺繡』分類

天文門	時令門	節序門	地理門	城市門
橋道門	宮室門	廟墓門	寺觀門	君道門
臣道門	人倫門	師友門	積老門	人品門
文学門	文章門	人事門	遊眺門	祖饒門
珍宝門	飲食門	器用門	百艸門	百花門
果実門	樹竹門	飛禽門	走獸門	鱗介門
昆虫門				

つぎに（表2）として、『円機活法』<sup>4</sup>の分類を示す。なお、『詩苑綺繡』には立てられていない分類には※印を付した。

（表2）『円機活法』分類

天文門	時令門	節序門	地理門	附城市門
附橋道門	宮室門	祠廟門	寺觀門	君道門
臣道門	※百官門	仕進門	人倫門	師友門
積老門	人品門	※麗人門	文学門	※仕官門
※氣門	人事門	遊眺門	※慶弔門	※附慶賀門
祖饒門	※謝惠門	珍寶門	※服飾門	飲食門
器用門	※音樂門	※書画門	※図画門	百艸門
※百花門	※百穀門	※百果門	※蔬菜門	※樹木門

※竹木門 飛禽門 走獸門 鱗介門 昆虫門

両者を比較すると、『詩苑綺繡』が『円機活法』を取捨選択している具体的な様相がわかる。ただし、いっけんして気付くことだが、『詩苑綺繡』にある「文章門」は、『円機活法』にはない。しかし、実際にその本文を確認すると、この内容は独自に編者が補ったものではなく、『円機活法』の複数の分類の内容を取捨選択して一つにまとめ、新たに分類を立てたことが明らかである。

すなわち、『詩苑綺繡』には、『円機活法』の一つの分類の中で取捨選択を行っている箇所と、『円機活法』の二つの分類の内容を一つにまとめた上で取捨選択を行っている箇所、さらには『円機活法』の複数の分類の内容をまとめて取捨選択を行い新たに分類を立てている箇所が存在することが確認できる。

たとえば、『円機活法』の「君道門」は、「聖寿」、「聖節」、「寿皇太子」、「詔令」、「赦」、「爵禄」、「賞功」、「敬賢」で構成されるが、『詩苑綺繡』は「聖寿」、「詔令」、「赦」、「爵禄」を収載する。これは、『詩苑綺繡』が『円機活法』の一つの分類の中で、その内容を取捨選択した例である。

また、『円機活法』の「臣道門」は「忠義」、「諫諍」、「剛正」、「循吏」、「廉吏」、「能吏」で構成されるが、これに対して、『詩苑綺繡』の「臣道門」は「忠義」、「諫諍」、「入仕」、「謫迂」、「致仕」を収載する。つまり、『円機活法』の「剛正」以下を削除して、「入仕」以下は増補しているが、これは編者が独自に増やしたのではなく、『円機活法』の「仕進門」に「入仕」、「赴任」、「美任」、「聘召」、「謫迂」、「致仕」とあるその一部を取り込んだのである。したがって『詩苑綺繡』に「仕進門」の分類は立てられていない。つまり、これは『詩苑綺繡』が『円機活法』の二つの分類を一つにまとめつつ、その内容を

適宜取捨選択した例である。

さらに指摘しておけば、『詩苑綺繡』の「文章門」は、「賦」、「詩」、「覽友詩」、「吟詩」、「仕官」、「門地」、「名譽」、「名利」、「放逸」、「退休」、「聡慧」、「曠達」、「知音」で構成される。先に指摘したとおり、この「文章門」は『円機活法』には存在しない分類である。しかし、これは『円機活法』の文学門に「勤学」、「勸学」、「博学」、「経籍」、「読書」、「借本」、「儲書」、「囑書」、「文章」、「賦詩」、「覽友詩」、「吟詩」、「書簡」、「寄書」とある後半部分を独立させ（前半部分「勤学」から「囑書」までは「文学門」に収録する）、「仕官門」にある「仕官」、「門地」、「名譽」、「名利」、「放逸」、「退休」と、「氣門」にある「聡慧」、「曠達」、「知音」とを合わせて構成したものである。

なお補足しておけば、『詩苑綺繡』の「樹竹門」は、目録では「樹竹門」となっているが、本文では「樹木門」と標題が立っており、内容は『円機活法』の「樹木門」と「竹木門」をまとめて取捨選択したものである。

このように、『詩苑綺繡』は、『円機活法』の「大意」を適宜取捨選択しながら、小本一冊にまとめたものであることが確認できる。これを、跋文では「初学」の者向きであるといっているが、昌琳の序を見れば「博雅の士」も、また利用者として想定しているごくである。たしかに、この内容は、作詩の基本を身につけていなければ利用し難いものである。とすれば、全くの初学者向きとして編集したものと言うよりは、作詩の基本を身につけたレベルから、ある程度漢詩詠作に習熟したレベルまで、幅広い層の利用者として想定したもののように思われる。



## 二 『詩林要玄』

つぎに、『詩林要玄』（延宝八年十月序）だが、これも『国書総目録』に収録されておらず、国文学研究資料館の「日本古典籍総合目録データベース」にもその名が見えない。これは巻頭に「大倉鳳洲 王世貞 校正」とあるので当然ではあるが、ただし『詩林要玄』という酷似した書名ならば、『国書総目録』に記載される。しかし、残念ながら、これも「元禄書籍目録による」と記載されているのみで、所在は不明。上野洋三氏「詩の流行と俳諧」も「詩林要言」の書名を『国書総目録』から引くのみである。

いっぽうで、新潟大学佐野文庫に『詩林要言』が所蔵されていることが、同大学の「新潟大学 古文書・古典籍コレクションデータベース」で検索できる。しかし、データベース上で公開されている画像を確認すると、実際にはこれは『詩林要玄』であった（なお、同書の書誌情報については、国文学研究資料館「日本古典資料調査データベース」に調査カードの画像が公開されているが、こちらは『詩林要玄』としている）。

たしかに、「玄」と「言」は、崩して書いた場合に書体が似るため、混同される可能性がある。とすれば、『詩林要言』と『詩林要玄』が同一書である可能性も出てくるが、当時刊行された書籍目録を参照すると、『詩林要玄』は五冊本（天和三年増修本『新增書籍目録』）、『詩林要言』は六冊本（貞享二年刊『改正広益書籍目録』など）と記載される。とすれば、『詩林要玄』と『詩林要言』は、いちおう別のものであると判断できそうである。

佐野文庫所蔵本は一冊本（上・下・下之二の三巻一冊本）だが、今回偶目し得た伝本（個人蔵）は、第一冊のみの欠本ながら、背に「五内」と墨書があり、もとは五冊本であったと推測され、書籍目録の

記述と一致する。以下、その書誌を記す。

書型	小本欠一冊。16.0 cm × 11.1 cm。
表紙	原装縹色表紙。
題簽	なし。表紙左肩に題簽が剥落した跡があり、そこに「詩林要玄」と墨書。
見返し	原見返し。「雪斎藏版／校正無訛／詩林要玄／不許翻刻」。
序文	序題「詩林要玄序」。序者・年記「岿／龍集上章渚灘陽月既朔樗斎隱士何有真書／「可有真印」（陰刻方印）「樗斎隱士」（陽刻方印）。四周单边。每半葉五行十字内外。丁付なし（全二丁）。
目録	目録題「詩林要玄 上総目」（末尾に「詩林要言総目終」とあり）。四周单边白口單黒魚尾。柱題「詩上目」。中縫に丁付「一（〜四）」。每半葉十行二十字。
本文	内題「詩林要玄上」。四周单边白口單黒魚尾。柱題「詩」（ただし、「三」〜「十二」丁、「十五」〜「二十四」丁は「詩上」とする）。中縫に丁付「一（〜六十五）」。
丁数	每半葉十行二十字。
備考	全七十一丁。
	最終丁最終行は「城市門」の見出しで終わっている。
	なお、佐野文庫本の見返しは白紙、巻末には「延宝九辛酉歲孟春吉辰／梓行」と刊記がある（前掲データベース画像参照）。

つぎに、序文を示す。<sup>(6)</sup>なお、序者の樗斎隱士、編者の梅氏、とも  
にその伝記的事項については、目下のところ明らかにし得ない。

## 詩林要玄序

广大者天地也。充塞者万物也。其中人之為靈也、目色耳声、運之于筆舌以為文為詩。然古來詩學之「(一オ)書、行世者多矣。只簡帙重大、提携不便、所以為煩也。今畏友梅氏、少而好學。取其大意与品題、彙次小刻、目曰詩林要玄。凡俾童「(一ウ)習輩、於叩銅刻觸之会、無得意忘言之憂。其雅趣可以嘉焉。刻成示余曰、中流之瓢子、庶幾有補于大雅歟。因題于其首。告「(二オ)龍集上章沿灘陽月既朔楞齋隱士何有真書／「可有真印」(陰刻方印)「楞齋隱士」(陽刻方印)「(二ウ)」

## (訓み下し)

広大なるは天地也。充塞なるは万物也。其の中、人の靈為る也、目色耳声、之を筆舌に運び、以て文と為り詩と為る。然れば、古來詩學の書、世に行はるる者多し。只、簡帙重大にして、提携不便なれば、煩と為る所以也。今、畏友梅氏、少くして學を好む。其の大意と品題を取りて彙次小刻し、目して詩林要玄と曰ふ。凡そ俾童習輩、叩銅刻觸の会に於て、意を得て言を忘るの憂無し。其の雅趣、以て嘉す可し。刻成りて余に示して曰く、中流之瓢子、大雅に補すること有るを庶幾ふ歟。因て其の首に題す。

この序文には、『円機活法』の書名は記されず、「古來詩學之書、行世者多矣」と言い、「取其大意与品題」とのみある。しかし、本文を参照すれば、『詩林要玄』は『円機活法』の「大意」と「品題」を摘録したものであると判る(後掲図版⑩参照)。つまり、『詩林要玄』は、『詩苑綺繡』と同趣の内容を持つが、「品題」の部分も併せ

て摘録していることが『詩苑綺繡』との相違点となる。

また、『詩苑綺繡』が『円機活法』を省略したり統合したりしながら三十一の門を立てているのに対し、『詩林要玄』は『円機活法』のすべての門を収録している。すなわち、上巻には「天文門」から「仕進門」まで、下巻には「人倫門」から「器用門」まで、下之二巻には「音楽門」から「昆虫門」までを収録する<sup>6)</sup>。この点も、『詩林要玄』と『詩苑綺繡』の相違点である。以上の相違点は、結果として、六冊本と一冊本という両書の分量の違いとなっている。

## おわりに

以上、これまでほとんど注目されることがなかった二種の詩語集について、書誌的事項とその内容を報告した。興味深い点は、両書がともに『円機活法』の摘録であったことだ。『詩苑綺繡』が延宝五年序、『詩林要玄』が延宝八年序(延宝九年刊)であつてみれば、ほぼ同趣旨の内容を持った二種類の書物が、ほぼ同時期に並行して刊行されていたということになる。これは、当時における『円機活法』の影響力の大きさを示す事例として注目に値しよう。

また、稿者は、さきに『氷川詩式』を利用して編集された詩論書について報告し、明代に刊行された詩論書の流布の様相について考察を加えたことがあつた<sup>7)</sup>。本稿で報告した事例も、共に明代に編集刊行された詩学書普及の具体的な様相を示すものとしても興味深い。

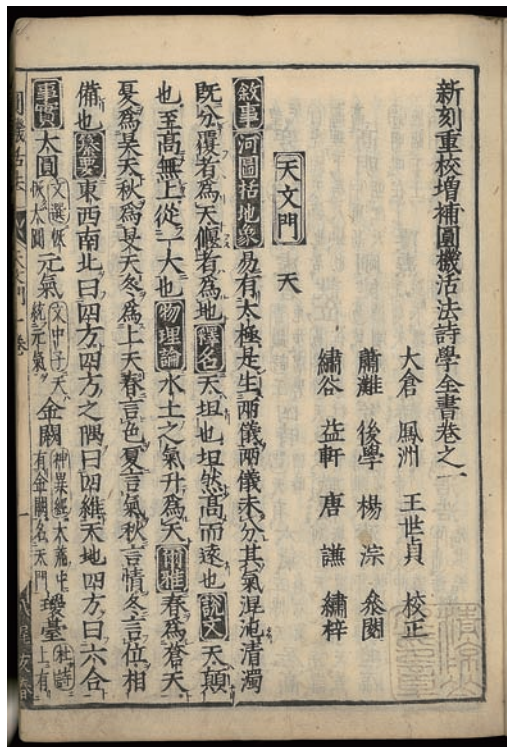
『詩苑綺繡』も『詩林要玄』も、あるいは今回は未見に終わった『詩林要言』も、いずれもいわゆる「稀観本」ではない。とすれば、新たな伝本を見出す可能性は充分にあるだろう。今後の課題としたい。

注

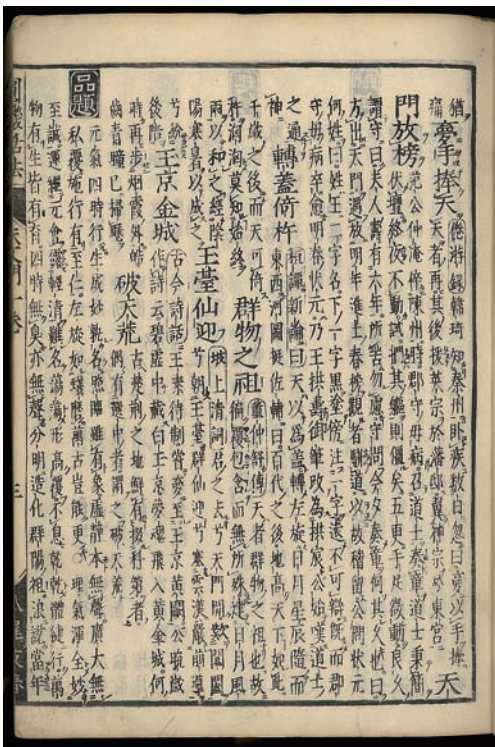
- (1) 以下、書籍目録の引用は『<sup>江戸時代</sup>書林出版書籍目録集成』一〜四、<sup>徳島義典</sup>所編『<sup>徳島義典</sup>斯道文庫、昭和37年12月〜昭和39年4月』による。
- (2) ただし、序文の四丁分を含めれば、本書は全部で九十九丁となる。最後の丁数は符合するので、欠丁ではなく、はじめから飛び丁であったとも推測されよう。
- (3) 翻刻にあたり、用字は通行の字体を用い、私に句読点を補った。原本の訓点も合わせて翻刻したが、合字は適宜「トキ」「シテ」「コト」などと改めた。また、訓読は必ずしも原本の訓点に従わなかった。なお、補写された第一丁には、訓点は記入されていない。
- (4) 個人蔵の和刻本を参照した。
- (5) 翻刻にあたり、用字は通行の字体を用い、句読点は原本の「。」印に従って適宜付した。
- (6) 下巻と下之二巻の内容は、佐野文庫本の画像を参照した。
- (7) 拙稿『北山紀聞』巻四「詩格」と『水川詩式』（『国文学研究』第139集、平成15年3月）、「翻刻『童蒙詩式』（『湘北紀要』27号、平成18年3月）、「童蒙詩式」考―近世前期の漢詩作法書一斑―（『<sup>近世</sup>研究と評論』第71号、平成18年11月）。

(参考図版)

①『円機活法』巻之一 天文門 天 巻頭（二才）

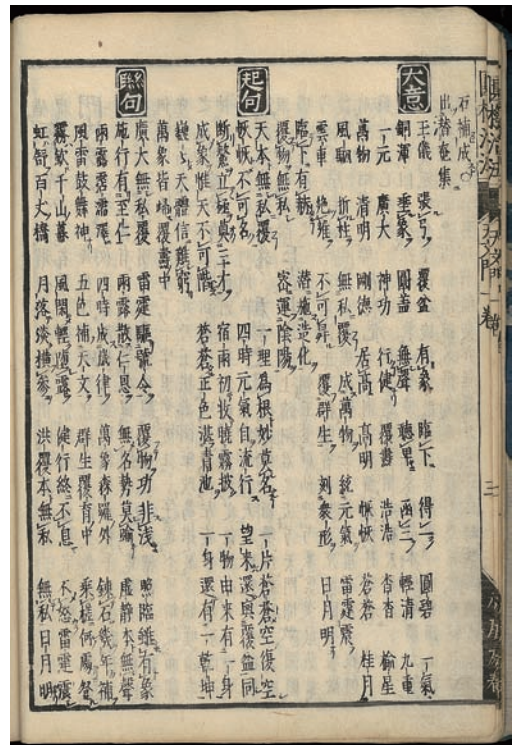


②『円機活法』巻之一 天文門 天 品題（三才）





③『円機活法』卷之一 天文門 天 大意(三ウ)



④『詩苑綺繡』序(末尾・目録(冒頭))



遊眺門 <small>第九</small>	祖饒門 <small>第十二</small>
珍寶門 <small>第十</small>	飲食門 <small>第十二</small>
器用門 <small>第十一</small>	百艸門 <small>第十四</small>
百花門 <small>第十三</small>	果實門 <small>第十六</small>
樹竹門 <small>第十五</small>	飛禽門 <small>第十八</small>
走獸門 <small>第十六</small>	鱗介門 <small>第二十</small>
昆蟲門 <small>第十七</small>	

目録畢

天文門	玉儀	張予	覆盆
有象	臨下	得一	圓碧
無聲	聽卑	函三	輕清
一元	廣大	神功	行健
萬物	清明	剛德	居高
浩浩	杳杳	榆星	萬物
恢恢	蒼蒼	桂月	風馴
無私覆	成方物	紅元氣	絕維
不可昇	覆群生	刈衆勝	日月明

則為欠事此言為殺風景者  
難論焉今人往往作詩而不  
知典實不諳熟語故其言涉  
淺陋又可歎也此編登詩壇  
之階梯寄心於吟詠者所當  
急蓋作風騷將基也若能識  
之則奪錦之榮寫屏之名豈  
在遠哉

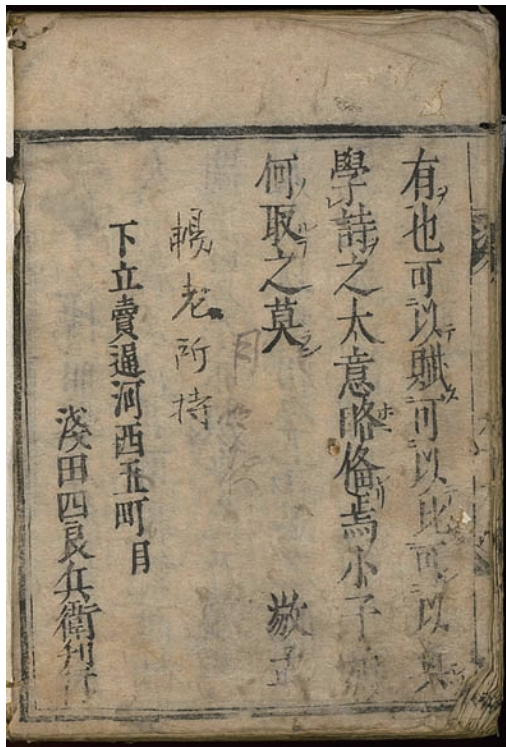
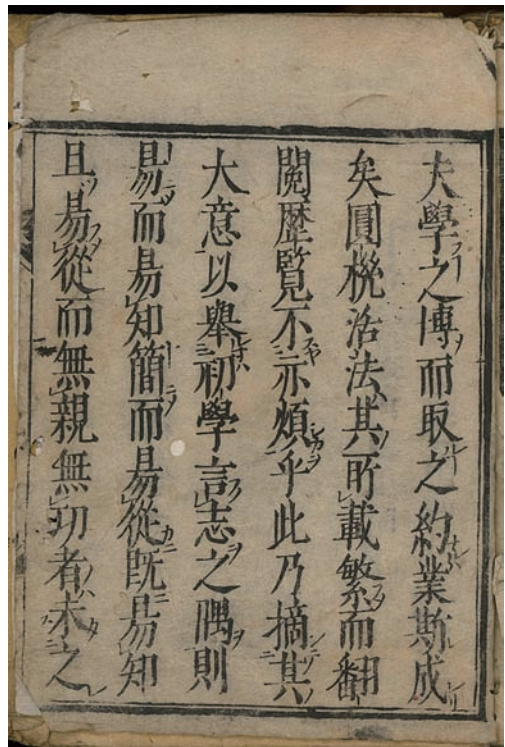
昌琳跋

延寶五年三月三日

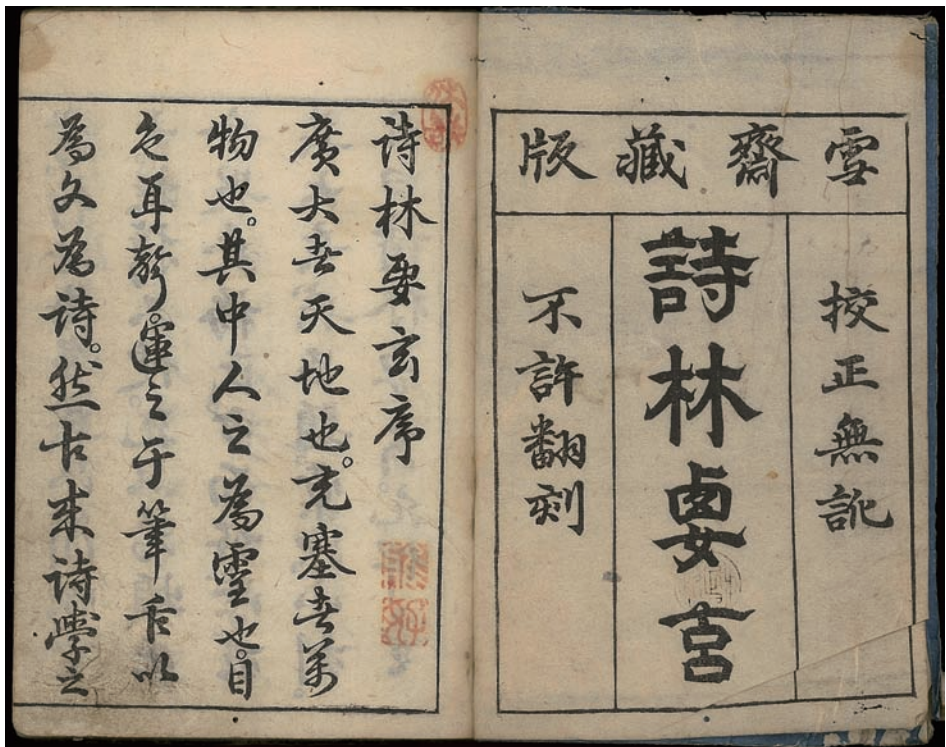
藤昌琳跋



⑦『詩苑綺繡』敬孟跋・刊記



⑧『詩林要玄』見返し・序(冒頭)





龍集上章  
泥灘陽月  
阮朔  
樗齋隱士  
何有真書



詩林要玄 上總目

天文門

天  
日  
日影  
斜陽  
春日  
夏日

秋月  
冬月  
日蝕  
曝日  
月  
新月  
殘月

月影 月桂 待月 賞月 步月 中秋月

不見月  
十四夜月  
十六夜月  
月蝕星

景星 老人星 北斗 殘星 河漢 雲 風

春風 夏風 秋風 冬風 狂風 颶風 松

竹風雨  
久雨  
驟雨  
夜雨  
梅雨  
祈

祈晴 喜雨 客中雨 春雨 夏 秋雨 冬

雪  
雪晴  
雪意  
雪聲  
喜雪  
春雪  
露

詩上目

詩林要玄上

天文門

大倉鳳洲王世貞校正

天  
元氣四時行生成妙孰孰名照臨雖有象虛靜本

无聲廣大无私覆施行有至仁左旋如蟻磨万古豈

能更○理氣渾全妙至誠運經元會露輕清雉名蕩

上形高覆不息乾上躰健行万物有生皆有育四時

无臭亦无聲分明造化群陽祖浪說當年石補成○

出潛庵集  
大意  
玉儀  
銅渾  
張弓  
垂象

覆盆 圓蓋 有象 无声 臨下 聽卑 得一

函三ヲ圓碧輕清一氣九重一元萬物

四

⑩『詩林要玄』本文卷頭

論上

四

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_